

## 第2回 滋賀県社会教育委員会 概要

〔日 時〕 令和3年2月10日（水）

14:00～16:00

〔会 場〕 県庁北新館5-A

（オンライン会議）

### 【出席委員（五十音順）】

板倉 正直委員	加藤 芳顕委員	金井 文宏委員	高野真知子委員
田口真太郎委員	橘 円 委員	富永美砂穂委員	永井 泉委員
平尾 香子委員	藤村 祐子委員	藤原 麻美委員	宮本 麻里委員
望月 美希委員	吉田 尚子委員	(14名)	

### 1 開 会

○議長挨拶

### 2 議 事

(1) 審議 テーマ「これからの地域を担う人材の育成・確保のための  
社会教育・生涯学習のあり方」

- これまでの取組について
- 次世代を担う地域リーダーの育成のためのプラットフォームについて
- 令和3年度社会教育関係団体・機関等への補助金交付について
- 今後の審議の進め方と次年度の事業について

### 3 その他、諸連絡

### 4 閉 会

○課長挨拶

### 【別紙資料】

- 資料1：令和2年度滋賀県社会教育委員会会議の取組報告
- 資料2：事例紹介資料（藤原委員・田口委員）
- 資料3：令和3年度滋賀県社会教育委員会会議に関する予定
- 資料4：令和3年度人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業
- 資料5：令和2年度社会教育関係団体・機関等への補助金交付額一覧

## 1 開 会

○議長挨拶

## 2 議 事

### (1) 審議テーマ

「これからの地域を支える人材の育成・確保のための社会教育・生涯学習のあり方について」

### ○これまでの取組について

#### 【議長】

それでは、まず審議テーマに関わって、今年度取り組んできたことについて事務局より論点整理したのについて説明いただき、その点についてももう少し議論を深めたいと思います。説明願います。

#### 【事務局】(別添：資料1について説明)

- ・第1回社会教育委員会議の概要と論点整理
- ・第1回視察調査(子育て応援カフェ LOCO・余呉小中学校)について報告

#### 【議長】

今の事務局の説明に質問等ございましたら、よろしいですか。

では、初めてのオンラインによる会議ということですので、ブレイクアウトルームで4つのグループに分かれて議論いただき、10分後に発表いただきますので、よろしく願います。

### 《グループ協議》

方法：ブレイクアウトルームで4つのグループに分かれ論点を絞って協議する。

論点：① 地域の人材育成の状況について

② 多様なつながりの創出について

③ 持続可能にするために

#### 【議長】

皆様お疲れさまでした。4グループの各代表の方、順番に発表をお願いします。

それでは、願います。

#### 【委員】

それでは、画面共有をして報告させていただきます。4人で議論させていただきました。簡単にビジュアルで分かるように、ジャムボードという電子ホワイトボードを使って簡単に議論をまとめています。うちのグループは、当事者意識ってところのキーワードが4人それぞれひっかかった部分だったのでそれについて、少し議論を深めました。

大きく四つの方向性で議論をしまして、一つは、当事者というのは、子ども大人も双方が持たないといけない。例えば学校においては、生徒自身がいかに当事者意識を持って話を聞き考えられるかというのは、常に教育的な課題であるという意見が出ていました。大人でいうとコーディネーターと言われる人たちの必要性もあるのですが、やはりこのコーディネーター自身も当事者意識を持ってもらうというのが必要だと話をしていました。

そこから少し発展し、ジャムボードの左上のほうになります。当事者意識をいかに引き出すかということは、コーディネートする力ではないかという話がありました。例えば、組織でいうとこれはトップダウンで行ってきた代表者が指示をして動くということ。学校もそうだと思うんですけど、そういう組織からこれからボトムアップでやっていくためには、それこそ一人ひとりの職員だったり、教員が当事者意識を持つことがすごく重要だという話もありました。

ここからさらに発展する形で、やはり傾聴することや話し合うことというのも、当事者意識の醸成につながるのではないかと。コロナが発生して改めて対話する力というのが、今、社会が注目しているのではないかと意見もありました。

少し意見は飛びますが、オンラインの活用というところにも、意見がありまして、学校で今、オンライン化がどんどん加速しているところで、事例として授業参観で大人が来ると非日常な学校になってしまうけれど、オンラインでの授業参観だと現場の普段の様子が見ることができるといい部分も見えてきたと。

あと外部講師もオンラインだと気軽に呼べて、参加しやすいみたいな話もあり、今回のように電子ホワイトボードで意見の整理するみたいなこともできるので、ICT というのは「習うより慣れろ」みたいなところで、若い人たちが楽しんで、どんどん発展していくんじゃないかっていう、そんな話がありました。私のグループは以上です。

#### 【議長】

ありがとうございました。次の方、お願いします。

#### 【委員】

私のグループは、今年子育て応援カフェの視察を提供していただいたその場では、子育て世代の方がつながっておられる、そういうつながり方。そして、私の場合は学校と地域がつながるといってそういうつながり方をしている。もう一つは青年団を中心として、その青年層が地域の中でつながっておられるってというような、そういう何かそれぞれのつながり方っていうのを、話題に上げながら、これが切れ目なくつながっていくっていうことが、社会教育の中で、とても大事なことじゃないかなってようなことを、話しました。

社会教育って言ったときに、最終的な目標は何なんだろう。あるいは、まちづくりっていうようなこと等もそうなんですけれども、どの論点でしゃべるかってすごく間口が幅広くって、短い時間でしゃべるのは難しいなっていうこともありましたけれども、やはり切れ目ないつながりをつくるために、私でしたら、将来的、地域でつながっていくためには、学校にいる間に自分は地域の一員であるっていうことを自覚すること。であるとか地域の人に支援をさせていただいて、今の自分があるであるとか、そういうことを、地域の人とともにいろいろ活動する中で、自覚をしていってほしいと思っています。

それを踏まえて、そこから社会に出て、そしてその社会の中で自分ができることは何だろうか、というようなことを考えていけるような、そんな人になってほしい。それが切れ目なく社会教育としての役割をつくっていくということの一つになっていくんじゃないかっていうような話をしました。以上です。

#### 【議長】

ありがとうございました。次、お願いいたします。

#### 【委員】

はい、4人の中でこの間の視察に参加してくださったのは1人だけで、残りはYouTubeで拝見した者です。

子育て応援カフェ LOCO の取組を拝見して、誰かの課題をみんなの課題に変えていく力っていうものすごくさっていうのをすごく感じましたという感想がありました。

それとあわせて余呉小中学校での取組で、子どもたちが商売をするという、子どもと社会をつなげていくような取組、これも二つのものをつなげ社会とつながっていくということかと思います。

LOCO にしても余呉小中学校の活動にしても、それぞれの当事者を別の必要性とつなげていくという、繋げる力を持った人がまずいたことの素晴らしさを感じました。また、その機会を創り上げられたという素晴らしさをすごく感じています。

あと、「より良い学校がよりよい社会のためにある」という考え方が、全ての学校や地域にもっと浸透したらいいのになあっていうふうにもみんな感じていました。そこで、これからの社会でやっていくためにいろんな方の事、存在を意識しながら、活動できる人でいなければいけないし、そういう子どもたちを育てていかなければならないし、私たちもそういう存在になっていかなければいけない。では、そういったものがどうしたらつくり上げられるんだろうという話もしました。

どちらの取組にしても、多分すごく窮地に陥ったからこそ、次の一手が出たんだろうなっていうふうにも感じます。ちょうどいい、ぬるい状態で、何とかやっていけるところは、その次の一手をしなくても何とか賄えるから、そのままでいいという意識は当然働くだろう。でも、どちらの団体も、もう崖っぷちで、次の一手を打たないとやばいっていう状況だからこそ踏ん張れたのかなと思います。

その踏ん張れなくてもいけているところに、どう、やばい（危ない）という気持ちを起こさせて、次の一手を打たなければと思わせるのかというのは、やっぱりコーディネートしていく人の力かな。このままいったら限界が来るよっていうことを気づかせられる人、それに気づいている人が発信することっていうのもすごく重要になってくるかなあと感じました。

あとは、これは私が思っているのですけれども、学校で余呉小中学校の活動なんかも、学校があれば変わるといえるのは、やっぱり一人一人の先生というよりも管理職の手腕が大きいのではないかなあと感じています。

学校が地域連携をし、学校と地域と子どもと一緒に社会に入っていくってことを考えるときに、先生方ってやはり何年かで変わってしまわれる、管理職の方も変わっていかれる、変わっていく中で、その学校の風土とかもっとブラッシュアップしながらつなげていくけれども、変わっていかなくやいけないときに、3年ぐらいで校長先生が替わったらどうやってつないでいくのだろうという思いがすご

くあって、学校はどうやったら変わるのかというのはすごく、危機感として感じているところです。以上です。

#### 【議長】

すごく共感しますね。

つながってというのは、そこに地域と学校の中に、学校が変わっても現場でお互いに補完し合いながら、システムを活用することじゃないかと思ったり、学校だけであれば今おっしゃったように、その辺がなかなかつながっていかない。だから地域と学校が一緒になって出来たらいいなと思いました。

すいません。最後のグループお願いします。

#### 【委員】

私たちのグループは、全て学校の教員だったので、学校が地域とどう連携しているかというところの話をしました。一人の委員は甲賀町の中学校におられて、中学生になって地域を支える役割のほうに変わらんとあかんということを最初におっしゃいました。現在も地域の行事に参加している中学生が8割もいるし、何と50年前から中学生は、座布団を編み物で作って、地域の高齢者に届けるっていうこと50年間もやられて、その作品も見せていただきました。

これは、3年生が1年生に教えて縦の学年で座布団を作り、しかも地域の高齢者を訪問しておられる。そして高齢者はそれに対してのお手紙を返してくる人もあるということで、我々都会とは全然違うつながりがあるというふうに思いました。

もう一人は、今まで社会教育を教えておられるけれど、近江八幡の男女共同参画委員会に行ったり、教育委員会に行ったりして、現場に出会って驚きや関心を持って帰ってくるということを伺いました。

私の方は、立命館大学で食のマネジメントコースで学生と一緒にやっているんですけど、同様に地域に出て調査させていただくということで、滋賀県のフードロスの取組をされているNPOとか、ブラックバスを料理している現場に行き一緒に釣って食べたり、新たな近江牛を育てている酪農家のところにアルバイトで通う女子学生とか、草津で居場所づくりの活動をしている学生とか、地域に関わっていこうという学生が結構いるという気がしまして、やっぱり現場へ行くということが大事なのかなと思います。

社会教育と学校教育が連携するためには、社会の現場に何回も行くということが大事じゃないかなと思いました。それが当事者意識を起こすということだと思います。

それから、2番目ですね、地域外との連携も、コロナ禍でICTを使って、中三の英語の授業において石川県の学校と交流しているとか、あるいは福井県の特別支援学校と交流しているとか、もう本当にこれはかなり遠い地域である石川県とか福井県とそういう取組を始められてると伺いました。

また、スノーピークっていう新潟県に本社のあるすばらしいアウトドア商品をつくられている会社と連携を始めて、地域創生でスノーピークの商品とかノウハウを提供してもらって地域の子どもに何かやっついこうというプロジェクトを始められたっていうふうなことを聞きました。これも県外の企業と連なって、子どもたちに何かしようという動きかなと思いました。

我々、食のマネジメントの方では、スペインにバスクリーンセンターという食の大学がありまして、コロナ禍で飲食業界ホテル業界もすごく困っているときに、どんな取組をしているかを、立命館大学と

スペインの大学でディスカッションをしました。これはすべて英語だったのでかなり教員も学生も疲れましたけど一度やれてよかったなど、わかったことは、学校と地域の連携では、やっぱり現場へ行くということが大事で、そこで感じたことをしゃべり合うということが相当大事だなと思いました。

学外や地域外では、やはりICTを使ったら、かなり大胆なことができるんですけど、今後は、滋賀県外とやったことをまた滋賀県にどう返していくのかっていう、ここら辺は、これからの課題かなと思いました。

**【議長】**

ありがとうございました。

当事者という言葉が出ていますね。また、現場の体験の重要性と、それからコロナの関係でリモートの選択肢がふえて、こういういろんなバリエーションからどう選択するか。それから、コーディネーションっていかデザインカっていかその辺が、先ほどまとめてくださった調整する人、コーディネートする人の役割ってというのは大事ですよ。初めてのオンラインですがいい話ができたとします。

**○次世代を担う地域リーダーの育成のためのプラットフォームについて**

**【議長】**

それでは次に移らせていただきます。

事例紹介ということで、お二人からそれぞれ紹介をしていただきます。最初に、青年団の事例からお願いします。

**【委員】事例紹介①「滋賀の地域づくりで活躍する県内外の青年団活動」（資料2）**

はい。それでは私のほうから事例報告というふうになると思いますが、お話をさせていただきたいとします。

私は、日本青年団協議会という青年団の全国組織の方で活動しています。よろしくお願ひします。今日は滋賀の地域づくりに活躍する県内外の青年団活動ということで、事例を報告させていただきます。

まず、青年団って何ということですけど、御存知の方も、あまり聞き覚えがないという方もいろいろいらっしゃると思いますが、一応、定義としまして、「地域を拠点に青年の生活を高めることを目的に、地域のため、また、自らの成長のために仲間とともに活動している社会教育団体」というふうに定義をしております。

主に活動しているのは20代から30代の青年が中心となっております、基本的にはほとんどが仕事を持ちながら、夜とか休日に活動をしているというのが実態です。サラリーマンが多いですし、県内では製造業や一部自営業とか様々な職種のメンバーが集まって活動している団体が多いです。

そこで、滋賀県でいうと今は、合併前の旧の市町村単位で活動をしているところがあります。活動の主な財源としましては、それぞれの市町からいただいている補助金、また青年団の各団員が年会費として払ってる団費、あとそれ以外は、イベントとか模擬店などの収入が主な財源となっております。

滋賀県内では今10団体が活動しておりますけれども、その活動の実態という結構様々で、1人や2人で細々と続けているところも中にはあります。

青年団自体の歴史はすごく古くて、大本は室町時代の若衆宿とか若者宿といったところに起源を持っているというふうに聞いてます。今の形になったのは戦後でして、70年を超える歴史を持っている団体があります。

活動の原則としましては自主自営ということで資金は補助金をいただいての部分もあるんですけども、自分たちで今、何がこの地域に必要なだろうとか、こういうことやってみたいよねというところから、活動のスタートをしまして、それもつくり上げていくというのが主な活動になっております。

事例としてまず一つ目、守山市にある守山青年団の「こんにちワーク」という事業の紹介をさせていただきます。守山市の青年団は一旦、休団といたしますが事実上潰れて、また新しく平成15～16年ごろに立ち上がった団体です。

現在、この団体については、守山市生涯学習課の方が、非常に手厚いバックアップをされておられまして、大学生から社会人まで幅広い年代の青年たちが活動をしています。この「こんにちワーク」という事業は、一言でいうと職業体験の事業になっています。守山市で働いておられる方、またはその青年団が持っている職業、あとは大学生が専攻している分野ですとか、そうしたことをブースにそれぞれ分かれまして、子どもたちに守山市で生きている大人たちとじかに触れ合っていて、自分たちが将来ここで、大人になったときというものを体験してもらおうという事業になっています。

今回はコロナ禍であったので非常に規模を縮小していますが、例えば声優体験ですとか、裁判員の体験ですとか、今回はいつもより趣向を変えたものになっています。普段ですと車屋さんとか、あと警察の鑑識の方に来ていただいて鑑識の体験ですとか、ネイルサロンの体験ですとか、何かこう子どもたちが憧れる職業を実際体験してみる、子どもたちの夢をつくっていきこうということをモットーに活動をさせています。通常で300人ぐらいの親子の方が来られるっていうような大規模な事業になってるんですけども、今回はちょっとコロナ禍ということで大分少ない人数での開催だったというふうに聞いてます。

次はチャレンジクラブ新旭夏祭りです。これは私の地元でもあるんですけども、チャレンジクラブというのも、もともと新旭町青年団というのが一旦潰れて、そこからもう一度立ち上がった団体になります。

この高島市の新旭地域というのは、平成の大合併の後、この新旭の地域だけが夏祭りがなくなってしまったという経緯があります。そこで、活動をしている団体、若者たちがやっぱり自分たちの地域にも夏祭りが欲しいということで、上の先輩方とかその辺りにいろいろノウハウをもらいながら1から手作りで作った夏祭りになっています。いわゆるイベントというか本当に昔ながらの手作りの夏祭りなので、模擬店とかを出していただいている方も地域の委員会の方だったり、商工会の女性部の方だったり、あとは近隣の青年団だったりということで、口づてでお願いをして、出てきてもらっているというみんなで作っています。この提灯とか櫓も土建屋さんの仕事をしている仲間が、この材料を借りてきてつくってくれたり、提灯も地域の電器屋さんのおじいちゃんが、つけてくれたりとか、そういう形で地域で作った夏祭りになっていて、この浴衣で太鼓を叩いているのが青年団のメンバーで、それも、青年団の古い先輩に太鼓を自分たちでたたきたいということで仕込んでいただいて。昔だったら女の子が太鼓をたたくってなかなかちょっとタブーだった部分もあるけれども、そうやって女の子でも太鼓をたたいて、いつかこの祭りに来てくれる子どもたちが、今度は祭りをつくる側になってくれたらいいよねっていう、思いを持ちながら、今、12、13回目を迎えています。

次は、今私が所属をしている日本青年団協議会で開催をしているリボン心のふるさとフォーラムとい

う事業です。青年団もやっぱり、少子高齢化の波の影響をすごく受けていまして、やっぱりこう育成ですか持続ということがすごく難しくなってきた中で、自分たちだけで何かをするのではなくて、同じように地域で、まちづくりに取り組んでいる人たちとつながっていこうよということで、これまで東京で一極集中という形で開催をしていたのを、去年度ですけれども、地域で実際活動してる人たちの地域に出向こうということで、山口県で開催をさせていただきました。

山口県と愛媛県で実際に地域おこし協力隊として活動しておられた方で、その後、その地域に定住をされておられる方をパネリストとして来ていただいて、同じような地域づくりという活動をしている者同士がどういうふうに連携していけるのかとか、そういったお話をさせていただきました。

実際、このつながりが発端になって、高知県の若者と、愛媛県の実際来ていただいた方が同じ四国ということで、連携をして何か事業を創っていこうというような動きも今芽生えているところではあります。

活動から見る青年の姿ですけれども、実際、青年団の活動に入ってきて、多くの若者たちがやっぱり今まで職場と家の往復になった生活に違う彩りが出たという声をよく聞きます。正直、活動している中では、面倒くさいことのほうが多いです。面倒くさいし大変やけども、人と関わることが好きになった。あとは、1年間が本当にあつという間に過ぎていくようになった。自分の生きる場所を見つけられた。若者の中で憧れるという感情ってどんどん薄まっているように私は感じるのですけれども、実際同じ団で活動している先輩ですとか地域で活動しておられる方に、憧れるっていう感情を大人になって久しぶりに抱きましたっていうような声をもらいました。

そういったことから青年団の中では縦横の人間関係とか、地域での役割、あとは自分自身の成長、ともに活動する仲間への思いやり、あとは、自分たちが暮らす地域課題への関心、そういったものも、活動の中から見出していくということをお大切にしております。

青年団活動イコール私は人づくりの現場かなというふうに思っています。やはり青年団活動っていうのは、ずっと続けられるものではないので、ある一定のところに来たときには卒業していくものだというのが、あるので、そのあと地域人として生きていくための勉強期間とか、準備期間というふうな捉え方をしておられる方が多いかなと思います。

先ほどもあったように地域課題は他人ごとではなく、自分たち自身がやっぱりそこにこれから暮らして生きていくので、そういう自分たちの課題であるということ、っていう物事の捉え方を、やっぱりそれも学べる場所かなあというふうに思っております。

冒頭の議長挨拶でおっしゃられましたけども、多様性ということで、今やっぱりこの青年団活動に関わる若者たちもすごく多様性というか価値感が多様化してきています。今までこうやってきたからということが余り通用しなくなってきたなあ、いろんな多様性を認めながら活動をしていくっていうところが、今すごく難しくなっているなというのは、私自身が20年近く携わってくる中で直面しているところです。受け入れる側の価値観というのはなかなか変わらないけれども、そこを柔軟にいかにしていくかっていうところは今後必要なことかなあと思っております。

どうしても活動人数というところかというと、どんどん右肩下がりになっているのが現状です。自分たちだけというところではなくて、いろんなところとつながっていくことも必要ですし、お話を聞いている中でやっぱり大学生の方々が、もっとすごくポジティブに前向きに活動して貪欲な活動しておられる方が多いなと思うので、やっぱりこの青年たちという辺は、足りないなと活動として思うところがあるので、地域での活動をしてきた大学生とかをきちっと受けとめられる受皿として、青年団というものも今

後、必要ではないかなというふうなことを皆さんのお話をお伺いする中で思いました。以上、私からの報告とさせていただきます。

#### 【議長】

ありがとうございました。

先ほどどこかのグループで、切れ目なくつながる中に青年団という団体があったらいいな、私の今の職場に高島の人がありますけれど、青年団で知り合って結婚してこちらに来た方で、だから、昔の青年だってそういう何か出会いの場があって、今の青年団とはどのようなモチベーションで青年団に入ってきたのかなあと思ったりするんですけど、ここでも先ほどの出てきた他人ごとでない、当事者意識するのは大事なんですよ。何か質問や御意見ありましたら。はい、お願いします。

#### 【委員】

はい、今、おっしゃられた期間限定だっていうところがすごく共感するんです。私どもはPTA活動をさせてもらって、PTAというのもやっぱりやる人っていうのは右肩下がりになっていますし、組織的な課題をたくさん抱えています。

その中で、PTAをやりながら思うのは、義務教育の間ぐらいなんですね、子育てにがっちり取り組んで先生のことや地域のことやいろんなことの課題が相混ざった状態で組織活動をする。主体になるっていう期間っていうのは、やっぱり子育てをしているたかだか10年ちょっとぐらいの濃密な時間なんです。

それだけの期間の活動になかなか賛同していただけなかったり、この指とまれでもなかなか人が来なかったり、でも、今おっしゃられた青年団の20代から30代の間だけ、活動できる期間が決められてるっていうか、その間しかやらない活動っていうのは。例えば、私が、小中高大行きました社会人になりました、青年団に入りました。そこで、いろんな活動して地域のかかわりが出来ました。結婚しました。結婚して親になりました。親になったら次はPTAをやりました。PTAをやりながら、例えばその働いたのを働かなくなったから、それで人とのつながりをPTAとかを通じて社会や地域や学校や行政やとつながっていきます。

それが終わって、今度は例えばがっちり自治会の活動に携わるとか、それぞれの世代ごとで、それぞれ社会とつながる、いろんな団体を選びながら、ずっとこれをやらなきゃいけないとか、ずっとPTAじゃなきゃいけない、ずっと青年団でないといけない、ずっとこれ伝えていかないといけないっていうことじゃなくって、世代ごとのフェーズでいろんなパッケージのところに行つてつながればいいのかっていうふうには、今のお話を聞いてて感じました。

#### 【議長】

今のご意見にすごく共感します。

せっかく学校で地域と学校が一緒になってやっているから、できたら地域のほうから、子どもたちの発達段階に応じて、先ほどもおっしゃったその世代ごとのフェーズっていうかパッケージのこんなのが、こんな団体が年代ごとにある。例えば、中学、小学校卒業したら地域で、こういう皆様のこういう団体がある。それと並行して、青年団が次からあるよと伝える。小さい頃から地域や生涯学習にはこういう団体があって、この年代だったらこういう仲間があって、こんないいところもあるっていうのを、ある程度シ

ミュレーションっていうか、そのキャリア教育の中に組み込めないかなって今思っていました。

だから、知らないから何か面倒くさいので入ろうとしないっていう部分があるので、その押しつけたらあかんけど、そういうものもあるっていう情報提供を学校数もちょっとつながってる地域の中で、学校だけでキャリア教育するより、地域の中に入れてらいいと思います。そういう情報提供を子どもたちに発信するっていうことはいいんじゃないかなと思うんですよね。

どうですか。今の期間限定ってものすごく魅力的だと思いませんか。

#### 【委員】

なるほどなあとお話を聞いて思いました。

子どもたちが実際、地域の中で、どんな活動しておられる方がいらっしゃるか、いろんな団体があるかっていうのは、余り知らないですので、そういうことを知る場があるっていうのもすごく有効だというふうにお話を聞いて、とても共感しました。

それと学校側で思うことですが、学校って何か学力っていうこととか、学力の向上って言うんですけども、私はこの学力っていうのはやっぱり、もっと総合的にとらえるべきであって、地域の人とつながるっていうことが本当の総合的な学力につながっていくんだということを、もっと学校の中で教員たちと認識しないとイケないなあというふうに思っています。

先ほど、どなたかがおっしゃいましたけれども、子どもたちが生きていくための力とか総合的な学力っていうのは、各地域とのかかわりの中ですごく高まっていくと思うし、力がついていくと、もし先ほどあった現場を知るとか、人と出会うっていうのは本当にその人がこれから生きていくための大きな力となっていく、総合的な学力を高めていく取組だと思います。そういう認識を学校全体が持つということが、子供たちの教育にとって、とっても大事だと思うし、それこそもう本当に学校教育と社会教育の連携はそういう視点で強くつながって行って切れ目のないことをしていくことが大事なんじゃないかなというふうに思いました。

#### 【議長】

ありがとうございました。次の方をお願いします。

#### 【委員】

今、人口もかなり流動化している中で、社会的孤立っていうのはやっぱり大変重要な問題になっているんですね。その社会的孤立をいかに防ぐかということを考えたときに、先ほどのそのフェーズごとのつながり、例えば、どこの地域に引っ越してきても、自分の役割が創出が地域にあるということが大事だと思います。そして、それを誰が伝えるのかっていうところがですね、子どものうちから伝えるということも大事でしょうし、大人になっても、そういった活躍の場がある地域をつくっていくのが大事だというふうに思いました。以上です。

#### 【議長】

では、次の事例の発表をお願いします。

【委員】事例紹介②「高校生が町の未来を考え地域を楽しむための次世代育成講座」（資料2）

それでは事例を報告させていただきます。

高校生がまちの未来を考え地域を楽しむための次世代育成講座ということで事務局からいただいたタイトルで報告します。実は、話を聞いていただいたら分かると思いますが、高校生の教育だけではなくて、大学生も大人も、高校生の教育を考えて実施することで、さきほどの青年団と一緒になのですが、周りも一緒に成長するのだということを、ぜひ共有したいなと思っています。

二つの事例とそれのフィードバックを二つお話ししたいと思います。

私は前回の7月の会議から今まで約半年間で、幾つかのプロジェクトを実施しているのですが一つは長浜市と一緒に高校生の社会教育のプログラムを実施しているのと、あと二つ目が、今、近江八幡市と一緒に、今週末報告会ですけど、社会教育のプログラムをしています。

これら今年度に、コロナ禍でどんなことやったかっていう報告をさせていただくと、それを踏まえて、実際に実施した現場の学生だとか、社会人たちと意見交換したので、そのフィードバック、そしてこれからやろうとしていることを情報提供したいと思っております。

一つ目、長浜市ですけど、これは動画をつくったので、これを流しながら共有したいと思います。近江八幡も長浜もしていることは基本的に一緒でして、実はこれ中学生も参加しているプログラムで、中高生を対象に、長浜に通っている学生を対象にしたプログラムでして、彼らが地域をもっと知ってもらい、それで自分たちも何か地域に関われないかということを考える、そういうセミナーを連続で3回実施をしています。

この動画で流れているのは長浜市の木尾町という、中心市街地から車で30分ぐらい離れたかなり山のほうの地域ですが、そこでの観音信仰をテーマに、地域の自治会さんに全面的に協力いただいて、ふだん公開してないこの仏像さん観音さんを見ていただいたりだとか、これをどういう仕組みで守っているかというのを実際にみんなでヒアリングをして、それを通じてまちづくりに取り組んでいる地域おこし協力隊の方だったり、大学生の方にも来ていただいて、事例を学んで高校生たちも何ができるかっていうのを考える、そういった半日のセミナーを企画し実施しています。

どの地域でも全く同じでして、いろんな大人に先生になってもらって、レクチャーしていただいて、最終的には、一方的に学ぶだけじゃなくて、中高生がそれを聞いて、自分たちでどうこの地域とかかわれるかっていうことを考える、そういったワークをさせていただいています。

これが全体のチラシになっていまして、今回はコロナの影響もあつたので本来、8月、夏休み期間にこういうプログラムを実施しようということで、当初は、市役所と企画していたのですが、自粛期間もあり、契約自体が遅くなったため、後半9月以降の実施になって、学生たちが1番、まとまった休みというか、活動しやすい11月から12月の毎週末、2連続3回のセミナーをする形でこちら実施しております。

対象地域が旧市街の黒壁スクエア周辺だったり、伝統産業だったり、先ほどの中心市街から離れたエリアということで、世代もばらばらでエリアもばらばらの対象地域を教材として、学びに行く、そういうプログラムを実施しています。

何でこんなプログラムをやっているかっていうところですけど、実は、各市町、総合計画という市町ごとに10か年の大きな計画をつくっていて、長浜市では、その中で、若者育成プログラムを重点施策、30とか40ある施策の中でも、トップ6の重点施策の一つとして、この若者の育成事業というのに取り組ん

でいるという経緯があり、今回我々もそれに協力することになりました。

過去に何年もずっと生涯学習課がやっていることでもあるのですが、こういった地域で学んで学生たちが実施するプログラムを 2 年間やってきていて、今年はコロナがあったので、ちょっと開催自体が難しかったのですが、やってみようということで、少しレギュラーな形で実施をさせていただいています。

僕が入る、地域学習に関しては、基本的に大人が企業の人たちが全部パッケージとして用意して実施する、すごい教育事業ではなくて、大学生たちとチームを組んで一緒に、大学生が学生の目線で、高校生たちに何を学べるかっていうプログラムも一緒につくりながら実施しています。

今回、長浜のプロジェクトでは、下の 2 人は実は長浜市出身で、去年、卒業したばかりの大学 1 年生の学生にも入っていただいて、上の 3 人は、こういう教育事業に関心のある大学生が手を上げていただいて、こういったチームと一緒にプログラム設計から実施、そして報告まで進めています。

実際に現場の様子で、例えば伝統産業の長浜ちぢみを学んで、実際に体験もさせていただいて、ディスカッションして、今後この伝統産業をどういうふうに生かしていけるかということディスカッションしています。学生たち、高校生や中学生は、たった半日 4 時間ぐらいだけ参加するだけなのですが、実は大学生たちが事前に現場にヒアリングに行ったりフィードバックして調査して、どういうパッケージだったら、高校生たちが楽しんで学べるかっていうのを、設計してもらって、向こうの人たちも一緒にディスカッションしながら、用意して、実施のほうを丁寧にしています。

最後、この 3 回のセミナーを通じて、やりっぱなしで終わりではなくて、最後に報告会というものを開催して、各地域で関わってもらった人たち全員集まって、市長や行政の職員さんとか教育委員会の方にも集まっていただいて、みんなで振り返って、来年度以降何しようかっていうそういった報告会セミナーなんかも実施させていただきました。

これはちょうどコロナで、感染者がふえる前に終わることが出来たので、対面でセミナーを実施したっていうようなものになってます。

近江八幡市でのプロジェクトは、またちょっと違うものですが、現在実施中でして、こちらも完全に非対面で、初回だけ少し説明会用で皆さん集まっていますが、あとはもう全部オンラインでセミナーを、今の長浜のようなプログラムを実施するという、かなり新しいことに挑戦をしております。

これも 7 月からずっと市役所さんと話をしてきましたが、コロナの影響もあってちょっと中止しようかみたいな話もありました。でも、いやいやちょっとやりましょうよっていうことで、何とか、やることになり、1 月後半から 2 月頭のたった 3 週間でプログラムを実施するという、そういったものを設計して実施のほうをしております。

大きなテーマは、折角このコロナっていうものがあるので、それをテーマにした、ツーリズム、近江八幡市は非常に観光客の多い観光地なので、新しい観光を考える、そうした少し難しいテーマで、意識の高い学生に入ってもらおうということで募集をして、約 15 人の学生に参加していただいてセミナーを実施しています。こちらもこういう大学生チームと一緒に運営の方をしております。

さっきの長浜のように、なかなか現場に行くことが難しいので、セミナーは基本的な zoom で、今日みたいな形で行っています。zoom のほうで大学生がプログラムの説明を行い、外部講師を招いて、レクチャーをして、各チーム、高校生グループを組んで、フィールドワークはそれぞれチームで行っていただく形で、密を避ける形で、フィールドワークの方も実施しております。

それと、右下に slack と書いてありますが、無料のオンライン上でのコミュニケーションツール、掲

示板みたいなものがあるので、それを活用して、いつでも連絡を取り合っ、チームの進歩を全員で支え合える、そういったやり方をどんどん活用して、ただコーチして学生にやっ、ではなく大人も行政職員も大学生も全員がフォローしながら、高校生の活動を支援する、そういったことを、今回、試験的に実施をしております。

よくわからない取組かもしれないですけど、1月後半から2月にかけて、三つのグループ、四つのグループが近江八幡をフィールドに、例えば食文化のことを、探求したり伝統文化を探求したり、いろんなことを切り口で、地域のリサーチをして、自分たちに何ができるかっていうことをまとめているのでその報告会を、今週末の13日に実施する予定をしています。

ここでは、市長にも入っ、学生報告、そして今後、中高生たちも交えて、どんなことができるかというのをディスカッションする予定になっています。

これらの活動を通じて、大学生や、社会人活動も振り返りを必ずしているんですけど、その中で、特に長浜の振り返りをちょうど先週行っ、ので少し簡単に共有したいと思います。

こういうようなコロナの中で、地域で学ぶこと、地域学習をすること、それを大学生たちや社会人が入っ、やること、学校外でやることに対して、よかった点、改善点、そして今後どうしていくかっていうアイデアの三つの軸で意見をまとめています。

右側の次のチャレンジってところが、ひとつ総括になっていますけれど、高校生の学外活動に関して、行政職員もそうですし、社会人も協力していますし大学生も参加しているので、実はこの高校生たちが、自由な発想でこんなことをしたりあんなことしたいってニーズに、大人たちが全面的に頑張っ、て応えるみたいなことをしている、ので、彼らの活動を通じて、本当に大人たちが成長していることを今回学びました。

実はこの活動を通じて、今までなかなかつながることが出来なかつ、た地域の人と行政の人の連携が生まれたりだとか、大学生が入ることで、今までこういう社会学習を受け入れてこなかつ、た企業さんやエリアの開拓にもつながっているということもわかってきました。

学生視点で言う、と、もっとプログラムの改善余地はあるよねという話もありますし、具体的な話もいろいろとあるのですが、やっ、ぱりこの活動を通じて、大人や周りが成長したって、いうのが大きな成果かなというふうに感じています。

ちょっと走りながらですけど最後に、今、環境省さんとか、こういった地域学習だとか、いわゆるSDGsに取り組む若手ユースの18歳から30歳と、いった、高校生たちを支える側の人たちの研修会をしよう、ということで、実は岡山と滋賀が連携して、オンラインとリアルな場と組合せた3回のプログラムって、いうのを実施する予定で今準備をしています。

環境省さんもこれまで企業向けのSDGsの研修会って、いうのをたくさんやっ、てきているのですが、今やっ、ぱりこのオンラインでコロナの中でできるって、いうこともあり、もっと若手のSDGsに取り組む地域、社会で取り組む、そういう若手リーダーを育てていきたい、という、と、今回、企画コーディネート役で一緒に入らさ、て、い、だ、い、て、若手のユースを育てるプログラムを準備しております。

事例の方、以上になります。

## 【委員】

今の報告を聞いて、実は私たちも大学生と一緒に宮崎県と新潟県で同じような取組を始めています。そ

これは、高校生たちが、現場の町おこしとかあるいは会社とかで頑張っている大人たちと出会うっていう場面があんまりないということで、我々も始めています。

企業の方も結構協力してくれて、新潟だったら雪の氷室っていうお酒とかいろんな食べ物を保存してそれで発酵さすみたいなことを高校生たちに教えてくれたりする。そういうことを通して、来年から高校では県の総合的な学習と言われましたけど、総合的な探究学習って名前が変わって、地域の課題とか、あるいは地域でこんなすばらしい実践している現場に行ってみて学ぶということを通して、学びへのモチベーションを高める。

例えば、ミツバチを養蜂している農家の所に行って地域の特産について教えてもらう。この蜜蜂の性質というのは生物の授業で習うことでして、この生物の授業で習うときに、体験をした生徒は学びのモチベーションが全然違う、変わってくるわけです。

まさに総合的な探究学習というのは、地域課題とか地域で本当に元気にお仕事をされている方、地域活動されている方と直接触れ合い、現場へ行って学ぶことにより、社会科とか生物とかいろんな授業は、本当に腹落ちするというか、これが社会に役に立つんだみたいな、そういうふうな意図で、来年から高等学校の学習指導要領が変わります。

学校教育の方も本当に地域や社会教育と連携しようっていうふうに、今まで偏差値教育とか多かったのですが、来年から大きくカーブしていくことになるのです。そういうときに本当にいいタイミングで実践されたなと思いました。以上、感想です。

#### 【委員】

いや、何か、なかなかこうできることが限られてる中でいろんな取組をされていて、何かすごいなと思って、2つとも聞かせていただきました。

まちづくりとかに中学生とか高校生とか、大学生とかが参加するってすごい大事だなと思っていて、何かなかなかこう、地域の人たちで地域をつくっていくっていうことって、感覚を育てないとなかなか育っていかないなと思っているので、そういうところで、こういう取組をされるってすごいいいなあと思いました。

大学でも何かこういうところにもっともっとたくさんの大学生たちが関わられるような取組ができればなと思います。

#### 【議長】

最後、貴重な時間いただいて少しお話させてください。今日お話されたいろんな団体を選びながら期間限定の世代ごとのフェーズに応じた機会や場があることが大切だと思いました。ぜひどこかで見える化して、今度、県社会教育委員連絡会議という市町の会議があるんですが、そこでも言ってみたいと思いました。

やはり、こういう情報をどういう形で子どもたちや若者たちに提供し、人生100年という少し Spann が長いかもしれないけど、人生のライフステージごとに分かるように示していくことがすごく大事だと思います。まちづくりに中高生が関わるという、今までだったら自分たちの地域でしたけど、そうではなくて青年団の取組であったようにいろんな地域の人とそこへ行って、また自分の地域に戻ってくる。そういうような、在り方というのが少子高齢化社会の中でのものすごく大事ななと思います。

今、自分のところでもそうですけど、自分の地域の中でやると何かみんな窮屈でやりにくい面がありますが、どこでも、どなたでも「この祭りに参加していいよ」というような門戸を広げて、そしてまた地域に戻ってくるっていうのも、地域をオープンなものにしていいんじゃないかなと思いました。

では、この後、事務局の方から次の説明をよろしくお願いします。

## ○令和3年度社会教育関係団体・機関への補助金交付について

### 【事務局】

はい。それでは、レジュメの3番目にあります社会教育関係団体の補助金につきまして、生涯学習課および子ども・青少年局よりご説明させていただき、皆様からご意見・ご質問等いただければと思います。

※令和2年度社会教育関係団体の補助金に係る説明（資料5）

### 【委員】

はい、基本的なことをお尋ねして恐縮ですけど、こうやって補助金が出ている団体、ボーイスカウトや青年団にしても昔からある団体かと思うんですけど、その基準というか、他にもいっぱいあると思うのですよ、そういう社会教育団体って。どういう団体に補助金が出されるのかということが知りたいなと思います。

### 【事務局】

県の補助金の対象になっている団体は、県域で活動している社会教育団体となっています。この一覧表にある県域のPTAやボーイスカウトやガールスカウト、子ども会など各市町など地域の活動もありかつ県域で組織もされている旧来からの社会教育関係団体に現在も表のような内容と形で補助をさせていただいています。

### 【委員】

これは、その補助する団体の見直しはなくて、去年のところは今年も補助するというような補助金の出方をしているのですか。青年団の数が減っているとかいろいろおっしゃっていましたよね。時代によって変わってきていると思うんですけど、そういう、例えば入替えとか、見直しとか、そういうようなことってというのは行われているのでしょうか。

### 【事務局】

それは毎年、こういった額であるとか、どういった活動をしているかなど確認させていただいて、見直し等をしているところで、一覧表に記載されているのは皆さん御存じのような認知度の高いところだとは思いますが、毎年、どのような活動が実施されたか確認し見直しを行いながら補助をしているところです。

### 【議長】

予定の時間が近づいてきまして、最後に、今後のスケジュールを確認してからあと、もしよかったら一言ずつ皆さんから発言いただいて終わるということでよろしいですか。

○今後の審議の進め方と次年度の事業について

【事務局】では、次年度の予定についてご説明させていただきます。

※令和3年度社会教育委員会議の予定について（資料3・4）

【議長】

最後、名簿の順に一人30秒ずつで申し訳ありませんが、感想・ご意見等をお話いただき、最後、まとめていただいて終わりたいと思います。それではお願いします。

【委員】

はい。今日の話聞いて学校、特に私は中学校ですけど、中学校の役割ってというのが少しづつかわかってきたように思います。地域で活躍する子どもたちを育てていきたいなと思っています。以上です。

【委員】

はい。本校ではSDGs教室というのをこういうふうに関催しました。これからも地域で、あるいは社会を担っていける高校生を育てていきたいです。事務局の方でいろいろと現地視察も含めて段取りいただきお世話になりました。どうもありがとうございました。

【委員】

P.T.Aの役割ってものをすごく考えて、学校と地域と子どもをつなぐのが親の役割かなあと思っています。今すごく難しくなってきたなかな人がいないのですけれども、どなたかがおっしゃったこの指とまれって、先ほどの地域活動も地域でやることの閉塞感みたいなものを、課題を共有する広いつながりみたいなものを活かして現状打破するっていうようなアイデアもあったので、そういう視点でP.T.Aを見直していてもいいかなあとというふうに思いました。ありがとうございました。

【委員】

はい。貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

発表もお伺いさせていただいて、やっぱり、中高生とかあとそのあと大学生っていうのが、次社会人になったときに活躍できる場所っていう青年団の立ち位置はしっかり考えていかないといけないと、いろいろ考えさせていただいたのと、あとは誰かの課題をみんなの課題にっていうのは本当に社会教育の中で、すごく共通したテーマかなというふうにお話をお伺いして思いました。本当にありがとうございました。

【委員】

ありがとうございました。いつもこの会議で事務局がいろいろ段取りしてくださっていろんな工夫してくださるのが本当にすばらしいなと思っていつも感動しています。

私は、アンテナのない人には何を言っても伝わらないのだなとつくづく思っていて、人がアンテナを立てるにはどうしたらいいんだろう、人が主体的に物に関わっていくにはどうしたらいいんだろうというのを、ずっと考えてるんですけど、本当に難しいなと思います。

今日皆さんのいろんな取組や、お話を聞いて、また自分も頑張っていきたいなと思いました。ありがとうございました。

**【委員】**

はい、ありがとうございました。私はいろいろお話を伺って、やっぱりその子どものうちに地域の一員で自分があることってということとか、あと地域で起きてる課題を、自分事っていうか、そういう風にみんなが思えるような地域になっていけばいいなというのを今日改めて思いました。ありがとうございました。

**【委員】**

ありがとうございました。先ほど簡単に意見を言わせてもらったんですけど、私も大学生がどういうふうにまちづくりとか地域と関わっていくかっていうようなことを、ちゃんと考えていかないといけないなと思いました。いろいろと情報共有ありがとうございました。

**【委員】**

はい、立命館の食マネも滋賀県にできて3年目になるんですけども、学生は結構、食に興味があるので、滋賀県の食との関わりをもっと増やしていきたいな。そういうプラットフォームとか仕組みをつくりたいなと思っております。今日はどうもありがとうございました。

**【委員】**

はい、ありがとうございました。私、青年団の活動のお話を聞いて、青年団の活動については、なんとなく知っていたつもりだったけれど、こんな活動もされているんだと思って、すごく勉強になりました。

それからいつもすごいと思うのですけれども、長浜で中高生が地域の人たちと議論しているというのは、何かうちでも出来ないかというようなことをとても思いました。

うちの学校では、まだまだ地域の中に入って中学生が話をするときに、何か教えてあげようが指導してあげようっていうスタンスで臨んでこられて子どもたちが黙ってしまうという、そういうパターンが結構あるので、何かヒントいただいたような気がします。ありがとうございました。

**【委員】**

はい。皆さんありがとうございました。青年団の発表で多様性という言葉がすごくひっかかって、私の中ではドキッとしたところです。会社の中でも、いろんな人の意見、やはり価値や存在、そういったことを認め合いながら、生きていかないと、生活していかないといけないなっていうことを感じました。ありがとうございました。

長浜市と近江八幡市の取組発表の中では、学生さんと一緒にプロジェクトを組んでいかれ、一人ひとりの存在を認めおられた。それぞれを生かすステージを設けられているっていうのは、各自の存在価値と

いうところを生かされてた取組になっているなど感心いたしました。

私どもも今、企業の中でいろんな社会貢献をしていく上では、なかなか厳しい状況ですけれども、この時期だからこそできることをまた見つけていこうと思います。今日はヒントをいただきましてありがとうございました。

#### 【委員】

今日はどうもありがとうございました。私が問題意識を持つてるのが社会的養護を必要とする子どもたちが、施設や里親のもとを離れたあとは地域に戻っていくわけですけれども、その地域でどう居場所をつくっていくかというところでした、今日の話題となったフェーズごとの場所があるというところのお話がありましたけれども、やっぱりそういった子どもたちが、地域に戻ったときに、自分たちの居場所をみんながどれだけつくっていけるかということが大事だなというふうに思いました。ありがとうございました。

#### 【委員】

はい、ありがとうございました。いろいろ思ったのですが、今日その当事者意識っていうところから、これまでやってきたこととか、正しいことっていうのをやっぱりずっとこう言い続けている部分は、すばらしいことやっているけど少し残念と思っていることが実はあります。

それは、やってらっしゃることを聞いていて、「あれ、おもしろそうやな」というふうな見せ方であったり、「未来のことをこんなふうと一緒に考えようよ」というような感じさせ方っていうのは、すごく大事なんじゃないかな。そこがこれまで続けてきている取組の課題ではないかと改めて思わせていただきました。

そのことが主体的な意識っていうのを出すためには、何か正しさとか、これまでっていうところからの一歩先へっていうのが大事なんじゃないかと思いました。ありがとうございました。

#### 【委員】

ちょっと中途半端ですけど、まず事例発表のところからのいろいろな意見と、今皆さんが言っていた意見を少しだけ結びつけてまとめています。大きく僕の話と青年団の話と二つをまとめてですけど、四つの方向性で議論が展開されたかなあと思っています。

一つは世代ごとに地域に関わるパッケージ、フェーズごとの話だったと思うのですが、そういうものが必要かと。これはキャリア教育の一環として地域活動地域化につながるだろうし、またこういう地域の行事だとか世代ごとの行事みたいなものを通じて身につく力があるのではないかと、学校の修学旅行みたいなものも、そういうふうに見直す必要があるのではないかと。

結構深い意見が出てきたのが、この社会的孤立をいかに防ぐことができるか右上の緑のほうになります。

多様性というダイバーシティ、キーワードが出たかなあとと思いますし、認め合う、思いやり、ITへの関心となり、人がつながるといところにもつながっていくかなと。

さらに、少し違う方向だと、地域内外の垣根を越えたつながり、県外だったり、国際的なつながりだったり、そういう活動もあるという意見が前半ありましたし、また行政だとか企業、市民っていう、実はそ

れぞれセクターが分かれ過ぎていて縦割りで分断されているものをこれから新しい連携というのが今生まれていくかと。

こうした連携が生まれることで、新しい、分断を超えた、つながりによっていろんな社会課題の解決につながる、今きっかけになっているかと。誰かの課題をみんなの課題にとというのが、大きなテーマになりそうだなあという意見が出ていたかと思います。

左下のほうは、青年団の活動が人づくりの現場、この人づくりっていうところでも、いろんな意見があったかなあと思っていて、結局地域の活動というのは自分自身の皆さん成長につながる、また当事者意識の気づきの機会にもなりますし、実は学生だけじゃなくて、大人が成長するきっかけにもなっている。

それとこうした取組というのは、続けていくことが大事ですし、歴史ある、青年団みたいな団体っていうのは、切れ目ない活動ができるという利点がありますし、1番最初の前回の振り返りもあったのですが、組織経営だとか、マネジメントする力というのも必要じゃないかというところにつながってくるかなと思っています。

それ以外、皆さんの意見もまとめていたのですが、こちらは間に合わなかったのも、また終わった後に共有したいと思っています。以上です。

#### 【議長】

本当にありがとうございました。皆さんの御協力で終わることが出来ます。ありがとうございました。

#### 【司会】

議長並びに委員の皆さんの熱心な御審議、ありがとうございました。

それでは最後に事務局より連絡をさせていただきます。本日の会議の内容につきましては、この後、取りまとめをこちらのほうでさせていただきます。また委員の皆様は御確認いただき、そして公開となります。

また、来年度になりますけれども、次回の会議、それから視察につきましては、日程調整をして決まり次第御連絡をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、閉会に当たりまして、滋賀県生涯学習課長より御挨拶を申し上げます。

### 3 閉 会

○課長挨拶